

入江 清佳

はじめに

長崎精靈流し(以下「精靈流し」)は、毎年八月十五日、盆に現世へ戻つた御靈(御精靈)を、再び西方淨土へ送る長崎の年中行事である。

長崎の盆行事は、明治維新後も旧暦の七月に行われていたが、明治十八年(一八八五)から明治十九年(一八八六)にかけてコレラが大流行し延期となる事態となつた。明治十八年(一八八五)のコレラ流行は、盂蘭盆の墓前での飲食が原因だつたとされる¹。このこともあり、明治二十一年(一八八八)から新暦の七月に行われるようになつた。

その後、昭和二十七年(一九五二)からは、「①七月は例年、天氣が悪い②七月は第一期末で、学期試験中に盆祭りがあるため子供が落ち着いて勉強できない。③上級学校に入つてゐる子供たちも八月ならば、休暇で帰省中なので一家揃つて墓参りができる。④全国的に盆祭りは八月が多い。⑤長崎の年中行事は普通一ヵ月早い、これも三〇数年前までは八月であったが、当時第一次世界大戦直後²、八月になると長崎地方にコレラの大流行を見たため、一ヵ月繰り上げて七月に変更されたもので現在ではその必要はない。⑥仏教の宗教行事として祖先に季節物を供えることになつてゐるが七月ではいもその他果物もまだ十分ではない³。」の理由により、盆行事の時期が新暦八月十三日から十五日までになり現在に至る。

江戸時代は、旧暦の七月一日から十六日の間、盆行事が行われていた。野口文龍の『長崎歳時記』によると、旧暦七月一日夜に、家紋を入れた提灯を家の軒に下げる「迎燈籠」の風習があつた⁴。この

迎燈籠には、先祖の御靈を迎える意味がある。また、精靈流しの終わった翌十六日から月末にかけて、先祖の御靈を見送るため燈籠が下げる。これを「送燈籠」といった⁵。

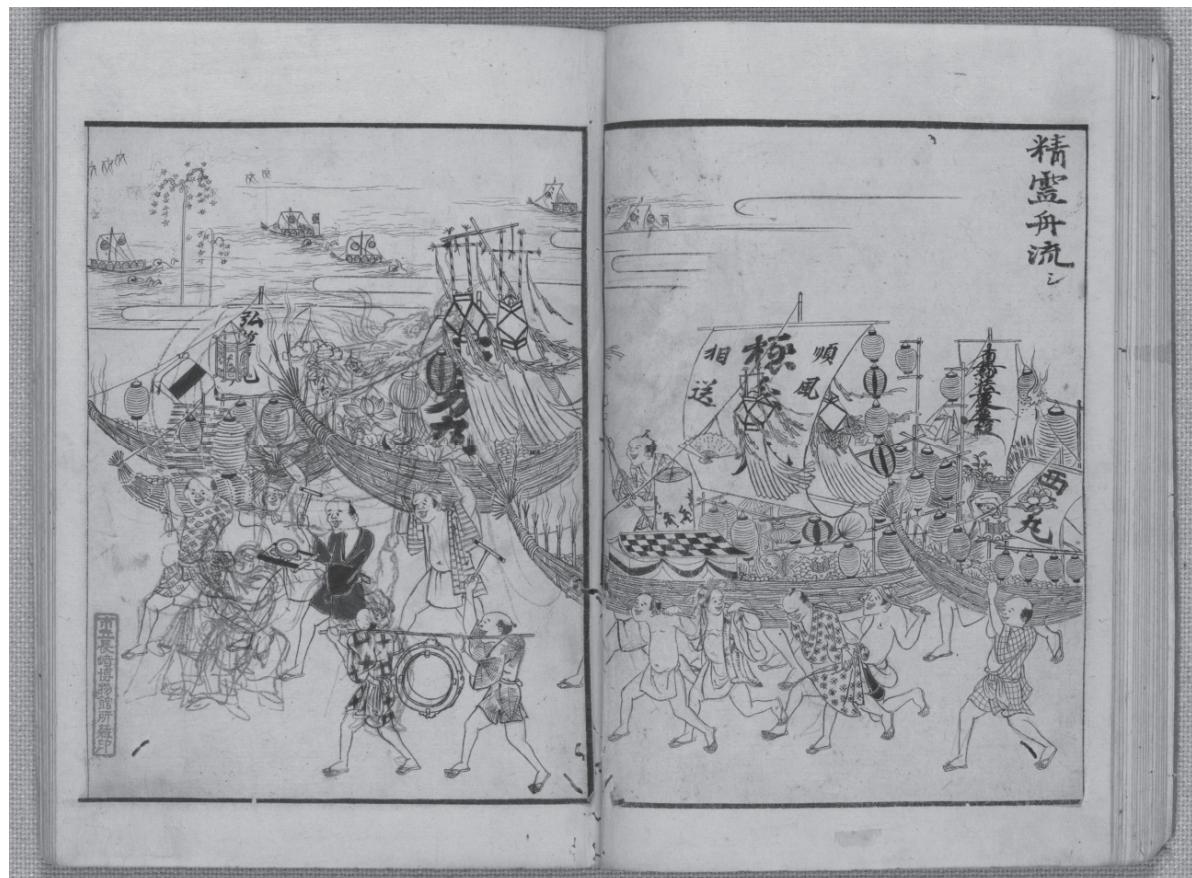
現在の盆行事と江戸から明治にかけて記録の残る盆行事の風習は、大きく変化し、前述の迎燈籠、送燈籠などは現在ではあまり見られなくなり、精靈流しの形態も変容が大きい。

本文では、長崎市内の四つの町(自治会)で行われている精靈流しの様子について報告する。

一・精靈流しの歴史

精靈流しの起源については諸説ある。『長崎名勝図絵』によると「享保の頃村の事好むもの一年藁を以て艇子を造り篷庫を設けて靈魂の供物を積流せしに其後家々之に倣ひて後は貴賤となく惣て藁蓆の船を造り種々の決行を盡して流す事一郷の風俗となれり⁶。」とある。また、『瓊浦通』には「風俗の上古ニハ無之中古唐人子孫通詞成蘆草拙ト云ヘル人儒者名有シニ或年藁以小舟造佛前供ヘシ品々入レ海上シタルヲ人々是見学爲人有シニ後々ニハ貴賤共此風習年々盛ニ遂長崎風俗為今如此元來唐人祭船流シヨリ出来成ヘシ⁷。」と書かれてゐる。これに對して『長崎市史風俗編』は「長崎の精靈船は弘誓の船より思付いたものであらう。その形状は確に寺院や坊間でよく見る弘誓の船の図によく似てゐる。いつ頃から行はれたかは不明瞭である。また、唐人が長崎で行彩舟流しの風習も長崎の精靈船の発達を促した事であらう⁸。」と異説を唱えている。

上記以外にも精靈流しの起源について、いくつか説があるが定かでない。



長崎古今集覽名勝図絵（長崎歴史文化博物館収蔵、絵（長崎）14-3）

また、「長崎市史風俗編」には「維新前後から明治二三年頃までは長崎の精靈流しは盛んに行われた。この時代に於ける精靈船の種類構造を左に説いてみやう」⁹と以下のような記述がある。

(一) 薦舟 竹を撓めて船の形を作り麦藁を以て之を裏みたるもので、長崎名勝図絵などに記してある通りである。小なるは三尺位から普通は四五尺また往々一間位のものもある¹⁰。

(二) 大船 大船の構造には杉丸太その他材木を用ひそれに青竹をとりつけ各部を藁にて裏み両舷などには注進飾のやうに藁を垂れておく。大きさは五六間位より三四十間に至るものさへあった。随つて帆も幅二間以上の高さ五間位に達するやうな大帆であった。そして帆柱もそれに準じて杉材などの長いのを用ひたものであつた¹¹。

(三) 中船 大船と小舟との中間の大きさを持つ船で一間半位から二三間位のものを謂ふのである。随つてその構造を折衷したやうなものである¹²。

(四) 催合船 一町の一部分、一町、或は近郊の郷村の民が連合して一船を造りそれに各自精靈物などを乗せて流すのである。それは一家毎に精靈船を作る手数を省くため、また精靈船を大波止まで担ぎ行くには居住の場所が余りに遠く隔つてゐるためである¹³。

同じく『長崎市史風俗編』によると「嘉永から安政にかけて、大波止にて精靈船に火をつけて流すやうな事が盛んに行はれていた。それで長崎奉行荒尾石見守は安政二乙卯年七月十三日『精靈流之節高灯籠鳴物等相用其上波止場ニ而船に火を付相流候儀等いたし間敷候』と訓令する所があつた。併しこの訓令は間もなく遵守されぬやうになつたらしい¹⁴」とある。現在も精靈船を海に流すことは禁止さ

れており、市内各所に流し場が設けられ、船はそこで解体される。

長崎名勝図絵や川原慶賀の描いた「精靈流し」の絵を見てもわかるとおり、精靈船は肩に担いで流すものだつた。戦後、船に車輪を取りつけ曳くようになり、現在それが一般化している。

二・精靈船の構造

精靈船は、みよし、船体、舵、帆により構成される。また、船を流す際、印燈籠や鉢が使用される場合が多い。(各部分の名称は、町によつて異なる場合がある)

(一)みよし

みよしは、舳先の部分を円錐状に大きく拡げ、その内側に照明を取り付け、町名や家の名前の書かれた「みよしかがみ」(以下「かがみ」)を前面に掲げる装置である。竹材を骨組みにすることが多く、大型のものになると支えとして上部に丸太を取り付ける。また、前面を放射線状に開くために箆^{たが}がはめられる。その構造は、骨組み全体をむしろで覆うため見ることはできないが、催合船では、各町で工夫が凝らされている。

内部には、燈明設備が施されるが、光源は蠟燭から電球、ライトまで多様である。これに、かがみで蓋をすると完成である。かがみは、個人のものであれば「〇〇家」と家の名前が書かれることが多く、催合船には、町名を記すところもあれば八幡町のように町名に由来する八幡神社の白鳩を意匠に取り入れるものもある。昔は、かがみも紙張りで、文字の図案も切り紙であつたという¹⁵。

(二)船体

精靈船の船体は、方形の木組みが多い。下部にはむしろなどを垂らし目隠しとし、内部に菰^{いも}包み(仏壇の供物を菰で包んだもの。単に「菰」と呼ぶ)を載せる。催合船は、各家庭から菰が集まるため、ある程度の大きさが必要である。また、船を曳く際の持ち手は竹を用いることが多い。

船体中段には、家紋を入れた提灯がかけられ、催合船の場合は、主に初盆の家の提灯が下げられる。前方には、線香立てや花立てが設置される。個人の船であれば、遺影が置かれるのもこの場所である。

上段には、箱提灯が設置されるか屋根となるが、個人や各町内でまちまちである。屋根はむしろを被せるところもあれば、意匠を凝らす場合もある。個人の船であれば船全体の装飾に人柄や趣味にちなんだものが多くみられる。船体は、単体の場合、複数を連結する場合がある。その数により「一連」「二連」など呼ぶ。

(三)舵

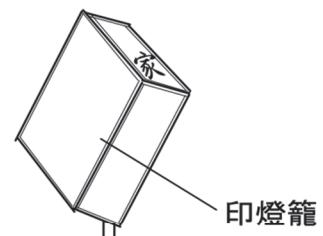
舵は、竹もしくは木材で四角く枠を作り、ここに藁やむしろを垂らす。船体と結束する場合は、繩や釘など手法は様々である。

(四)印燈籠

印燈籠は、船を先導するもので個人の家であれば家紋と家の名、催合船であれば町印や町名を記す。片渕の蕪や立山の花魁と髑髏の鏡など町それぞれ由来の意匠が見られる。

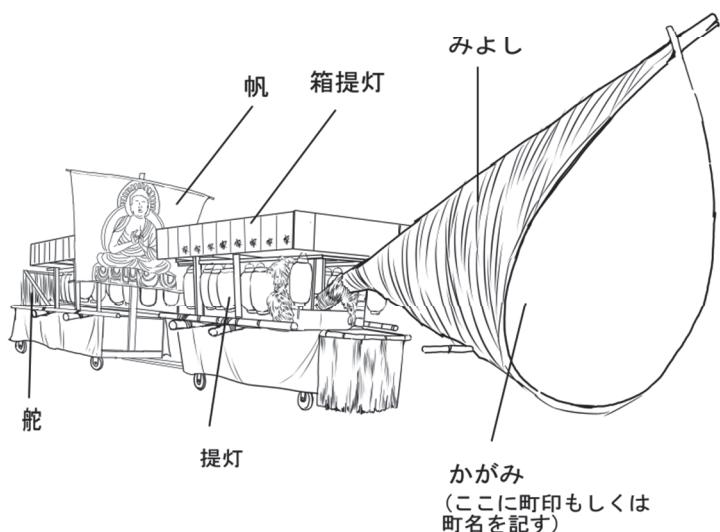
(五)鉢

本来、鉢の音は船の進行を指示するもので、その叩き方によつて

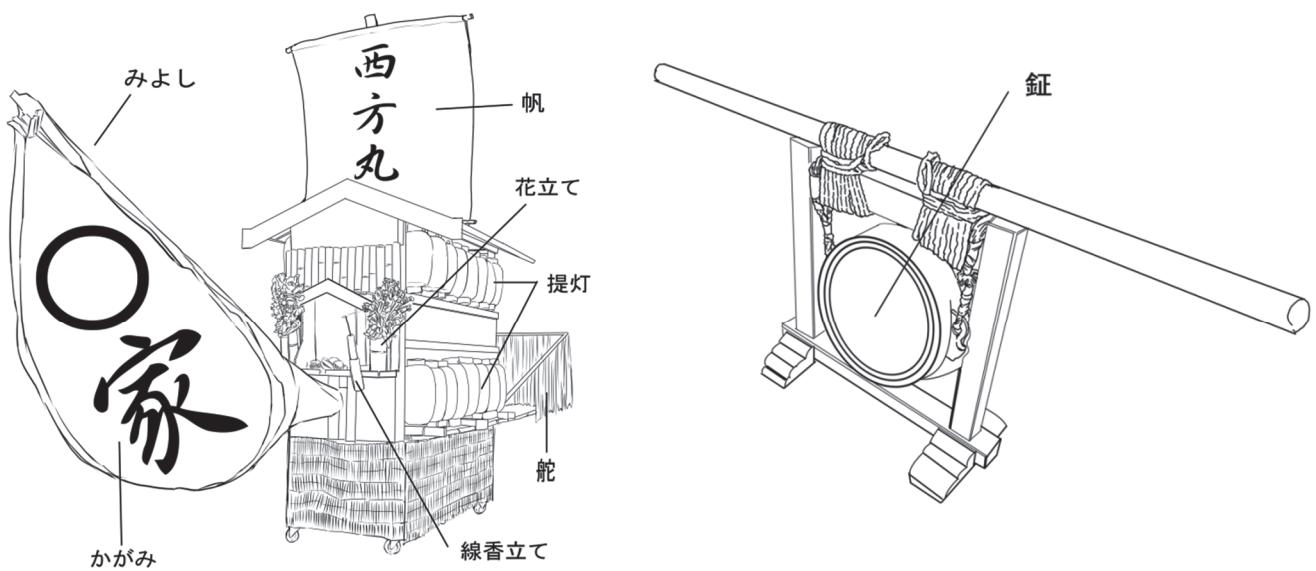


印燈籠

催合船



個人の船



※各名称は、町によって異なる場合がある。

前進や停止を知らせていた。現在は、笛によつて指示が出されることが多い。

「チヤンコンチヤンコン」と鉢を叩き「ドーアードーイ」という掛け声をかける。「ドーアードーイ」は「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」が訛つたものであると言われる。鉢は叩かれることで消耗するため一定期間で交換される傾向にある。しかし、今回の調査で、江戸時代を含む古い時代の鉢が各町内にあることが判明した。

(六) 帆

船体には帆柱が立てられ帆が張られる。

『長崎名勝図絵』には、「帆は白箋を用ひ極楽丸、西方丸、弘誓丸、淨土丸、或は六字の名号、七字の題目、各宗旨に隨ふ所を以て大書し四更の鐘を聞いて皆茗を煎し靈魂に供ふ¹⁶。」とあり、帆に書かれるのは文言であることが多かつたようである。これが、『長崎市史風俗編』の「明治時代に於ける精靈船の種類」となると次のように変化する。「帆は紙或はきれを用ひそれには西方丸、極楽丸、弘誓丸、淨土丸、六字の名号、七字の題目無量など云ふ文字をしたゝめまた釈迦、達磨、阿弥陀丸、觀音などの仏像を書いたものである¹⁷。」

その後、明治期になると釈迦や達磨など仏像が描かれるようになつてゐる。現在は、西方丸や六字の名号、七字の題目及び仏像を描いたものが主流である。

三・精靈流しの調査

初盆の家は、各自で精靈船を作成し出す場合と、町内の催合船で流す場合がある。催合船には、初盆の家はじめ各家の仏壇や精靈棚に供えた供物を菰に包んで載せる。このため、船体はある程度大き

いものでなければならず、製作も自治会挙げて行うことが多い。また、その意匠や構造には、各町の歴史や土地柄などが反映されている。本章では、平成二十八年(二〇一六)の盆行事における、催合船の製作について取材報告を行う。

(一) 新橋町の精靈流し

①町の概要

新橋町は、以前は「毛皮屋町」という名であった。しかし、宝永元年(一六七三)に、同町と本大工町の間に流れる中島川に東新橋が架設されたことに伴い「新橋町」と改称されている。

昭和四十一年(一九六六)、町界町名変更が行われ、諏訪町の一部となつてゐるが、現在も旧新橋町区域約七十世帯により新橋町自治会が構成され、精靈流しのほか、長崎くんちの踊町奉仕、歳末夜警など年間を通して活動を行つてゐる。

②精靈船の製作と構造について

新橋町の精靈船は、本体四m、みよし二m、船尾二mの全長約八mの一連の船である。製作期間は、日曜日を除いた八月四日～十五日の午前中までの予定であつたが、この年は十二日夜に完成した。製作人數は、日によって増減するが十人前後で、仕事の終わった十九時頃から二十一時頃まで作業を行ふ。

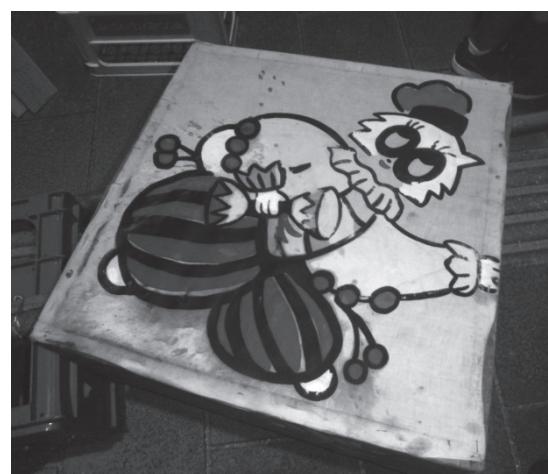
本体部分は木材、持ち手は竹で作られ、縄とボルトで固定される。本体の下部にはむしろを垂らし、この部分に各家庭から持参される菰を載せる。上部には提灯が左右十個ずつ計二十個掛けられ、更に船体前後に町名と初盆家名を記した行灯が取り付けられる。屋根は、木枠に布張りで水色と白の市松模様が描かれる。



新橋町精靈船



現在は、使用されていない戦前の鉦。
「蒲原氏」と彫られている。



新橋町印燈籠。新橋町のくんちの演
し物である阿蘭陀萬歳がモチーフに
なっている。

前方のみよし部分は、一本の竹を割つて放射状の骨組みとし、内部に籠をはめて固定する。骨組みの周りにむしろを巻き、内側に電球を配置し、かがみを口の部分にはめ込むと完成となる。みよしの根本は「みよしかませ」という船前方の木組みの部分にボルトで固定する。かがみには「新橋」と記される。

舵は竹で枠を組んでおり、これに藁を結いつけ船体とはボルトで固定する。

新橋町の船には、手描きと図版の二種類の設計図が存在し、毎年これを元に製作が行われる。

③精靈船に付属するもの（帆、印燈籠、鉢）

新橋町の現在の帆は、阿弥陀如来坐図が描かれており二十年ほど前から使用されている。

また、印燈籠には、新橋町のくんちの演し物にちなみ「阿蘭陀萬歳」を踊る狸が描かれている。帆と印燈籠の絵を描いたのは新橋町の住人あつた岩崎直哉氏である。

新橋町の鉢は、近年購入したものが使用されているが、それとは別に戦前まで使用されていた鉢が町内に保管されている。この鉢には「蒲原氏」と彫られている。

④精靈流し当日

十五日は、早朝から長崎市北部の琴海地区に杉の葉を取りに行き船体に飾る。これは、菰の匂い消しの意味もあるという。午前中に飾り付けを終わらせ、十六時ごろから各家庭の菰の受付を開始する。出帆を前に延命寺（長崎市寺町）住職の誦経があり、その後、子どもたちが鉢を叩きながら町内を一巡し、船が出ることを知らせる。担ぎ

手たちは、出発前に酒と肴（蒲鉾）をお淨めとしていただく。船を流す間はトラブル防止のために、禁酒となる。流し終わつた後に帰町して夜食をとる。

船は、十九時に出帆する。参加人員は、担ぎ手十人、随行二十人の計三十人。衣装は、法被で統一しているが役回りや年齢によつて衣装の柄や色が異なる。流し場までは、「ドードーイ」の掛け声をかけ鉢を叩きながら進む。

新橋町は、新橋町→市役所前→市立図書館前→テレビ長崎前→五島町交差点→元船町→流し場の順路で船を進める。今まで、何度かコースの見直しがされてきたが、近年このコースが定着している。

流し場に着くと、全員で合掌して「精靈さん」をお見送りする。この際、毎年繰り返し使用するかがみ、帆柱を含む帆、破損のない提灯、車輪、鉢、印燈籠を翌年にまた使用するためを持ち帰る。この部品などの再利用は、他の町でも行われている。流し場からは、「帰りの鉢」を鳴らしながら徒步での帰町となる。

新橋町自治会の精靈船は、東新橋のたもとで製作を行つていていため、當日中にその場の片付けと撤収作業を完了させる。

（二）榎津町の精靈流し

①町の概要

榎津町は、筑後榎津の人たちがこの地に移住してきたことが、町名の由来になつたとされる。筑後榎津は、筑後川の川口になる港町で、その水利により長崎と商取引のための行き来があつた。昭和四十一年（一九六六）の町界町名変更により現在は、万屋町と鍛冶屋町に併合されたが旧榎津町区域において、一二三五世帯からなる榎津通り

自治会を構成している。同町の精霊流しは、平成十五年（二〇〇三）から、青年部が中心となつて行つてている。

② 精霊船の製作と構造について

榎津町の製作期間は、ここ数年八月十三日から十五日朝までの三日間で、十三日が九時から十七時、十四日が九時から十五時、十五日は朝から提灯かけなど最後の飾り付けが行われ完成となる。作業には、連日十五人から二十人程が参加する。

船の全長は、みよしが四m、船体四m、船尾二mの計十mの一連の船である。また、菰、むしろ、竹、木材等の材料は、外部業者に発注している。

船体は、木枠を組み合わせ骨格を作り、発電機や菰を載せる下部、提灯を飾る中部上部に分かれている。みよしは、一本の竹を放射状に割つてそれを箆で広げている。それにむしろが巻かれかがみが取り付けられる。前方には、竹筒で作った花立てを置く。持ち手部分は竹製で船体に沿つて取付けられる。かがみには、町名から「榎」と記される。

③ 精霊船に付属するもの（帆、印燈籠、鉦）

榎津町の帆は、阿弥陀如来を描いた帆である。

印燈籠は「もみじと川」、「川に矢一本」が表裏に描かれている。これは、同町のくんち奉納踊「川船」及び傘鉾に由来する意匠である。側面には、榎津町の「エ」模様が施される。

鉦は、平成二十八年（二〇一六）に新調したばかりであった。花火入れを兼ねた台車に載せて移動しながら叩く。

④ 精霊流し当日

榎津町自治会では、十五日朝に提灯付けなど飾り付けを行う。担

ぎ手は二十人程度で服装は白いシャツ、江戸腹掛け、短パンで統一している。夕方から菰を受付、船に載せていく。前方には線香立てがあり、精霊流しの間線香を絶やさないようにする。出帆の告知を十七時三十分に町内に行うが、出発前の誦経や儀式は行われない。出帆までの時間、担ぎ手には自治会からの軽食と飲み物が提供される。十八時になると出帆する。コースは、榎津町→電車通り→県庁坂→大波止→流し場の順である。船の進行は、掛け声と笛の合図で行われていた。流し場につくと合掌後、船を解体し船体土台部分と発電機、鉦と台車を回収し持ち帰る。片付けは、十六日朝に行う。

（三）西山二丁目の精霊流し

① 町の概要

西山地区は、玉園山後背に広がる地域で、かつては一面森林に覆われていたといふ。『長崎市史地誌編』には「城ノ趾に対する玉園山背後の地域を古來西大和称へ一面森林をなして居た。長崎市居城西正面に當るからである」とある¹⁸⁾。

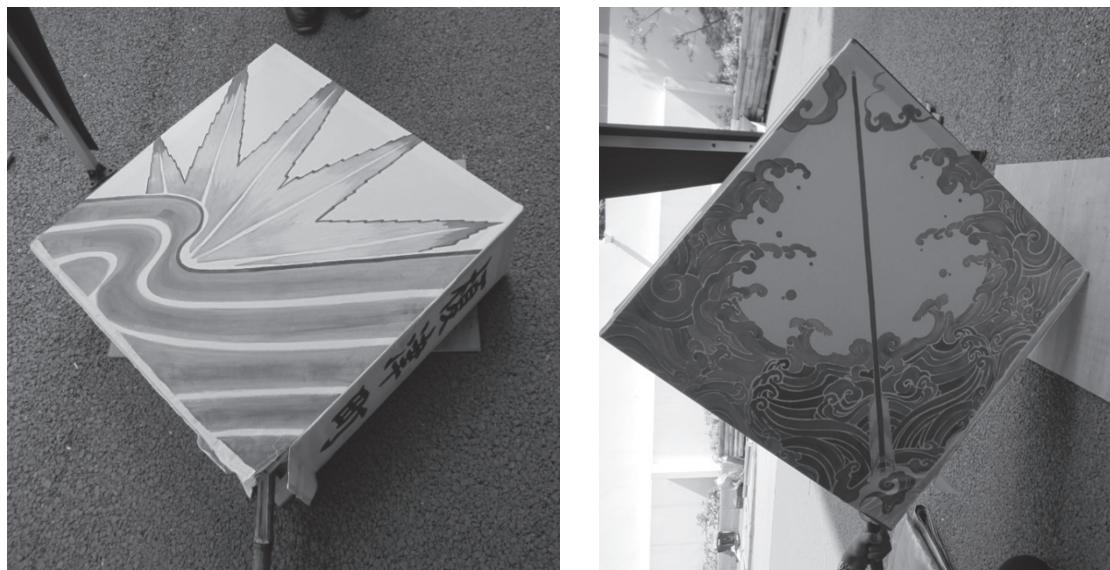
西山二丁目自治会の世帯数は三〇〇世帯ほどである。精霊船の製作は、同自治会町民と町外からの有志で行われている。八月七日から十五日までの九日間十～十五人程が作業を行つて居た。同町は、長崎くんちの神輿守町の一つである。

② 精霊船の製作と構造について

西山二丁目の精霊船の特徴は、その長大な船体ほぼすべてが孟宗竹（大竹二十五本、小竹五十本）で作られているといふ点にある。孟宗竹を使用しているのは、昔、木材が高価であつたことに加え、近隣に竹山が多く、竹材の入手が容易であつたためといふ。現在は長崎



榎津町精靈船



榎津町印燈籠。印燈籠は、「もみじと川」と「川に矢一本」が表裏一体に描かれている。

市田中町の中尾地区で町民自らが切りだしを行っている。竹は、しなりが良いものを選び、一週間程度乾燥させて使用している。中心の骨組みとなるのは、十二～十四mになる大竹六本で、船底の左右に各一本を、船体甲板左右に各一本、その外側に更に各一本を配置する。一番外側の竹が持ち手となる。先端が舳先、根本が艤となり、舳先で六本の先端が縄によってまとめられる。また、小竹は屋根の骨組みに用いられ、むしろを被せる。むしろは、福岡県八女市から取り寄せているとのことであった。

みよしは、竹を割つて放射状にし、更に縦に割つた竹を付け足す。その内側に竹で作った箍を入れ紐で結びつける。親柱として杉丸太を上部に取り付ける。竹の骨組みが完成した後、むしろを巻き、かがみを取り付け完成となる。みよしは、前面のかがみから根元まで約十一mある。本体に結合するため木枠(みよしかませ)にチエーンでその根本を固定する。このみよしかませは、前方の車輪及び舵にも繋がる重要な部分で、十年に一度作り替えられる。かがみには「2西山」と記される。

みよしかませと精霊船本体はじめ各所の結合に使用される縄は、熊本から仕入れたものである。先に記したが、西山二丁目は神輿守町であり精霊船の縄の結束には、神輿と担い棒を繋ぐ町独特の結び方が応用されている。

船本体に取り付ける提灯は約百個である。ほか、木枠に紙張りをした箱提灯が取り付けられる。光源は、電気では趣がないということで蠟燭を使用している。

五十五年ほど前に担ぎ手不足のため、一時期、菰をトラックに載せて流し場に運んでいたが、当時中学生だった石谷忠善自治会長が

伝統的な精霊流しがなくなることを非常に悔しく思い、以前の作り方を復活させた。設計図はなく、同会長が五十年前に地区の古老から工法を教わり、継承している。

③精霊船に付属するもの(帆、印燈籠、鉢)

西山二丁目の帆は、西方淨土に由来する「西方丸」と、町内の岡部弘氏により書かれている。二十九三十年毎に作り替えて使用する。印燈籠に描かれているのは、法被を着て提灯を持つ狸である。これは、かつて旧長崎經濟専門学校(以下「経専」と)と旧長崎医学専門学校(以下「医専」)がボート、野球、ラグビーなどでたびたび対抗試合を行つており、この際に経専が巧みな作戦を立てたことに対する、医専が揶揄して「古狸」と称したことに対しても、

鉢は、三十年程前に富山県の高岡市で製作された銅製のものが使用されている。

また、西山二丁目の船を動かす舵と車輪は約七十年前のもので、精霊船に車輪を用いた最初の事例ではないかという話であった。

④精霊流し当日

西山二丁目では、十五日朝に精霊船の最終の仕上げを行い、夕刻頃から十九時三十分頃まで町内各世帯の菰を受付ける。他に数日前から供物を預かることもある。出帆前には、鉢を叩いて町内を回り告知する。刻限になると、自治会長が挨拶をし、米、塩、酒を供えお淨めを行う。担ぎ手は、精霊流し前にお淨めの酒をいただくが船を流す間は、船の操作に影響が出るため飲酒はしない。代わりに飲み物として、氷水を準備する。なお、出帆時に誦経は行わない。

船の出帆は、十九時三十分から二十時までの間で、市内でも比較的遅い方である。かつて、西山の船は最も遅く出帆しており、「物事



西山二丁目精靈船の骨組み。ほぼ全てを孟宗竹で製作される。



西山二丁目精靈船



西山二丁目印燈籠。

が順調に進まないこと」を「西山船のごたる」という比喩表現が長崎にある。

西山二丁目の出発には、毎年、大阪府岸和田市からだんじり関係者十名程が参加しており、花火を独自に製作し持参する。この花火を出発前に打ち上げるのが恒例となつていて。

町内の担ぎ手は、七十人～八十人で岸和田の人たちもこれに加わる。また、子ども達が十人程参加する。服装は「西山二丁目」と町名の入つた法被と鉢巻を揃えるが、その他は自由である。

経路は、西山二丁目バス停→諏訪神社前(馬町ロータリー)→市役所前→市立図書館前→テレビ長崎前→五島町交差点→元船町→流し場の順であつた。船が長大なため諏訪神社前から馬町通りまでの上り坂が一番の難所で、全速力で勢いよく登りきらなければならない。また、みよしが巨大であるため、電線にかららないように高さを見つ電線上げの竹の棒をつかい、また、かませのチエーンで上下させて進行する。

流し場に着くと船を解体する。例年、帆、箱提灯、車輪、みよし、かがみ、みよしかませを取り外し持ち帰る。以前は、帰路で「退き鉢」を叩いていたが、現在ではマイクロバスに乗り合わせ、必要備品に関しては、トラックに載せて帰町する。帰町後は、自治会婦人部が夜食を準備しており、労をねぎらう。

(四)立山の精霊流し

①町の概要

立山は、岩原川流域の斜面地に広がる、かつては岩原郷といわれた地域である。江戸時代には、長崎奉行所立山役所や長崎会所、長

崎目付屋敷等があつた。現在、立山一丁目から五丁目まで五つの自治会で構成する立山連合自治会(約七百から八百世帯)で精霊流しを行つていて。

②精霊船の製作と構造について

立山の精霊船の製作は、八月十四日の一日のみで午前中から取りかかり、夕方前には完成する。製作人数は五十人程度で、自治会外からも加勢がある。

本体は約4mの船体が四連、船尾が2mそして特筆すべきは8mの長大な「みよし」である。全長約30mになる。これは長崎市内でも特に大型のものと言える¹⁹。戦後すぐは、船体が五連の時代もあり、当時は松の木を輪切りにしてトタンをまいて車輪代わりにしていたという。

また、みよしがかなりの重量に達することから、一連目の船体には重し代わりに子ども達や水、石を載せていた。子どもの頃、一連目に乗つたことがあると話す古くからの町民も少なくない。

精霊船は、竹と木組みを繩締めとボルトを併用して、組み立ていく。みよしの骨組みは、船体から上部と下部に一本ずつ丸太柱を渡し、それに垂直に木をはめ込み照明を取り付ける。これを囲むよう縦に割つた竹を放射線状に配置し根本を繩で結束、筒状になつた状態で三か所ほど金属製の箍をはめて形が崩れないよう固定する。この骨組みにむしろを巻き、立山の「立」の字が記されたかがみを嵌め込む。大型のみよしであることから、この部分の製作だけで十人程が作業をしていた。骨組みの作り方、菰の巻き方や結束の仕方などを自治会の年長者が若年者に技術を伝達していた。みよしは根元を繩で結束する。立山の精霊船は、みよしを高く持ち上げか



立山印燈籠。手鏡を模した形状で花魁としやれこうべの花魁道中が表裏に描かれ、人生の儂さを表現している。



立山精靈船

がみが地面から垂直正面に向く形一番美しいとされているのだが、この状態では電線にかかってしまう。このため、高さは、本体とみよしを繋ぐみよしかませにより上下に調整できるように工夫がされている。また、竹製の電線上げも併用する。

本体四連の屋根は、割竹と木枠で格子状に成形し、その上にむしろを敷く。屋根の下に取り付ける箱提灯は、一連目に初盆の家の名前が、二連目以降は蓮の絵が描かれる。その下に取り付けられる提灯は、初盆の家が持参する。舵には青いビニール紐が垂らされる。

帆柱は、二連目の後尾に立てられる。

③精霊船に付属するもの(帆、印燈籠、鉢)

帆は、阿弥陀如来坐像が描かれており、明治期から数えて三代目である。



立山のみよしかませ

印燈籠は、手鏡を模した形状で、花魁としゃれこうべの花魁道中が表裏に描かれている。これは、人生の儂さを表現しており、絵はある限り印燈籠はこれで四代目であるが、二代目には花魁と閻魔大王が描かれていた。なお、この花魁絵姿の印燈籠について立山一丁目にある地蔵堂に「立山町花魁絵姿印燈籠の由来」と題する説明書が残っている。文面は次のとおり

「明治初期ある坊さんが丸山の花魁をひかせ立山町に住まわせ会う瀬を楽しんでいたがこの坊さんが急死された。花魁は生活のためにアメ売りになり着飾つて町々を売り歩いた。三味線をひき歌い踊りながらの奇抜な商法だったでの評判となり誘惑の手も多かつたらし。だが花魁は身持ちをくずさず亡き坊さんへの貞操を守りとおしたと伝えられている。立山町の先人たちは花魁の義理がたさ、人情味をたたえて印燈ろうにあしらつたのである。長崎の精霊流しのなかでもひときわ目立つのが立山が出す精霊船、その大型なことさることながら坊さんとのロマンスを密めた花魁絵姿の印燈ろうである。今あるのは四代目。初代は高さ一・八メートルもあつて一人ではどうてい持てぬくらい重かつたという」

鉢は、直径三十五～四十cm程で、重さが三十kgにもなる。現在は、木枠に車輪を付け押しながらこれを叩いているが、昔はこれを男たちが担いで歩いたという。鉢の製作年代は不明だが、鉢の裏面には次のように刻まれている。

長崎村立山施主連名 市平治 吉兵衛 善蔵 吉平 長治郎 久之
助 仙治郎 喜平 卯三郎 仁平太 藤市 乙八 市松 徳太郎
講元 寅吉 熊五郎 長崎村立山施主連名 八郎治 安治郎 安平
治 伝九郎 又治 与平 元治郎 吉十郎 卯平太 兵藏 磯吉
亀太郎 乙吉 久吉 吉太郎 講元 金治郎 江戸西村和泉守作

ここから、この鉢が長崎村立山の人たちの出資により、製作されたことがわかる。また、「江戸西村和泉守作」と彫られていることから、この鉢は近世以前、江戸で作られたものではないかと思われる。

西村和泉守は、江戸時代前期の鋳物師で、江戸で梵鐘、燈籠、香炉、仏像などを制作している²⁰。以後、代々和泉守政時の名を世襲し十一代続いた家であつたため、製作年代を特定することは難しい。

西村和泉守名での製作されたものには、東京台東区妙経寺の銅鐘や福島県二本松市香泉寺の銅像阿弥陀如来坐像など文化財に指定されているものもあり、代々優れた技巧を持ち、広く名が知られていたと思われる。

④精霊流し当日

立山では、十五日朝から提灯をかけるなど飾り付けを行い、十八時頃から菰の受付を始める。船の出発前には、永昌寺(長崎市玉園町)の住職による誦経がある。その後、出帆を知らせるため鉢を打ち鳴らし町内を一巡する。自治会からの花火やアルコールの提供はなく、花火は初盆の家のみ持参し使用する。また、衣装は、各自治会で白色の法被を準備し、他は自由だが靴は花火などに当たつても危なくないものを勧めることであった。

担ぎ手は一連に十人から十二人がつく。船の順路は、立山→勝山

町→市役所前→市立図書館前→テレビ長崎前→五島町交差点→元船町→流し場で、大型船のため上り坂よりも下り坂に注意が必要とのことであった。進行中は、各連の間隔を詰めたり拡げたりしながら船を曳く。また、長大なみよしは電線に当たりそうな場合、電線上げを併用して高さを調整しながら進む。一番の難所は、金屋町のテレビ長崎前で、下り坂にカーブも加わるため慎重に船を進める。流し場では、かがみ、みよし、みよしかませ、一連目の土台、帆柱を含む帆、車輪を回収しその他の部分は流してしまった。帰路は、一連目の船体を曳きながら、退き鉢を鳴らす。帰町時には、当番の自治会婦人部が夜食を準備している。なお、前日の精霊船製作の際も食事は各自治会が当番制で提供する。

片付けは翌十六日の午前中に行い、引き続き「流れ灌頂」を行う。
⑤ 立山流れ灌頂

流れ灌頂は、古くから立山地区に残る伝統行事である。立山一丁目自治会の井村啓造自治会長によると、「お盆にこの世に戻ってきた靈魂が、未練を断ち切れず岩原川の淵に留まると言われており、これを翌十六日に流す行事」であるとのことであった。

流れ灌頂は、精霊流しの片付けの終わった八月十六日に長崎市立山地区(旧岩原郷)で行われる。立山地区五つの自治会で構成される立山連合自治会の恒例行事で、平成二十八年(二〇一六)は、自治会町民三名、町内の子どもたち約十名、付添の保護者五名が携つた。服装は平服で、一部の子どもたちには「立山流れかんじょう」と背中に書かれた法被を着用させていた。子どもたちは「無延命地蔵正尊」と書かれた短冊を結んだ笹竹を、大人は、木製の地蔵、鉢、全長



小型の精霊船。先端に線香を挿し、船に菓子を載せて町内をまわる。「昭和二十五年峰氏製作 伊東志磨、末永寅吉」と書かれている。



木製の地蔵。背の部分に「発起人末永寅市、磯田三郎 昭和六十二年十月吉日」と彫られている。



立山流れ灌頂。木製の地蔵、小型の精霊船、「無延命地蔵正尊」と書かれた短冊を結んだ笹竹を持ち、鉦を鳴らしながら町内を歩く。

九十四cmの小型の精霊船を持つ。精霊船には、線香を立て菓子を積み込む。

参加者は、立山一丁目の長崎歴史文化博物館横に集合し、地蔵堂で準備を整え、立山五丁目の県立長崎東高等学校前にある金毘羅神社鳥居付近まで車で移動する。以前は鳥居までの坂道を登り下りするコースであったが、現在では下りのみで行われている。一行は、立山五丁目から一丁目までの斜面地(住宅街)を、石段を降りながら進む。鉦を鳴らすが特に掛け声のようなものはない。途中、鉦の音を聞いてお布施を持参する町民がおり、そのお返しとして精霊船に積み込んでいる菓子を手渡す。

一丁目まで戻ると地蔵堂へ向かい、地蔵と精霊船を堂内に納めて、蠟燭、線香を立て全員で参拝する。子どもたちには、菓子と飲み物が振る舞われ終了となる。

現在、盆明けの八月十六日に市内でこのような行事を行っているところは立山地区以外ではなく、特筆すべき伝統行事であるといえ
る。

5 所感

今回の調査で、長崎精霊流しには、江戸時代、戦前、戦後、更に現在に至る時代の流れの中で、船の構造、流し方はじめその形態や運用に様々な変遷があることがわかった。また、各町内の催合船製作は、ほとんど口伝や経験則により行われており、手順書や設計図があまり存在していないことを知ることができた。

さらに、精霊流しの行事そのものが、自治会活動の一環として位置づけられており、年間を通して行われている他のさまざまな行事

と相互に関連性を持つていることがわかつた。

今回取材対象とした四つの町は、いずれも旧市街に位置する鎮西大社諏訪神社の氏子町である。各町は、同社の例大祭、いわゆる長崎くんちで踊町もしくは神輿守町をつとめるほか、節分会、納涼行事(花火大会、ソーメン流し)、もちつき、年末夜警と、年間を通じて各種の催しを行っている。さらに、日頃の清掃活動などにより共同体を維持し振興を図っている。精霊流しもその年中行事の一つなのである。

町の行事の運営や細かな作法には、その町の歴史や伝統がさまざまに反映されている。例えば、八幡町の精霊船のかがみには、八幡様のお遣いである白鳩が描かれる。これは、同地に八幡神社ができたことが町名の由来となつたことによるものである。くんちで八幡町が奉納する「弓矢八幡祝い船」にも最後に白鳩が放たれる演出がある。

また、西山二丁目は、長崎くんちの神輿守町である。神輿守町は、旧長崎村の六つの郷が六年に一度担当する。その際に、神輿に担ぎ棒を固定する繩の結び方は各郷で異なり、それぞれ地域で伝承されてきたものである。同町は、この神輿に用いる紐の結び方を精霊流しに応用している。

江戸時代から続く長崎の年中行事には、時代により様々な変化を見ることができるが、根幹には町の歴史や伝統が長い歳月を経ながらも息づいている。長崎くんちについては、様々な考察や取材報告がなされているが、精霊流しについては、その歴史や実態に関する調査・記録はあまり見られない。しかしながら、精霊流しもまた、地域の年間行事として重要な位置を占めるものであり、江戸時代か

らの歴史や伝統を色濃く残している。長崎精霊流しの実態を調査し、それを記録に留めることは、長崎の町文化や歴史について理解を深めるために有意義なことであると考える。

今回の取材報告にあたり、精霊船の製作を取材させていただき、併せて聞き取り調査にあたり貴重なご助言、情報、資料を賜りました次の方々に、心より感謝申し上げます。

立山連合自治会様、西山二丁目自治会様、新橋町自治会様、榎津通り自治会様、井村啓造様、石谷忠善様、

本馬健三様、越中勇様、本馬貞夫様、長崎歴史文化博物館様

(長崎市長崎学研究所学芸員)

注

¹ 『長崎市制五十年史』長崎市「第十二章衛生」P四六四

² 『鎮西日報』明治二十一年七月十七日の記事によると「長崎の孟蘭盆は今年より旧慣の日取りを改めたれども」とあり、この年に日程が変わったことがわかる。その前年の『鎮西日報』明治二十年九月四日の記事には「昨晩の長崎精霊流しは一場の大混雑を惹起せり」と九月三日に長崎精霊流しがあつたことがわかり、明治二十年と二十一年で実施された月が異なっている。このことから、『新長崎年表』のこの部分は誤りと考える。

³ 嘉村国男『長崎年表 下』長崎文献社、P二七三

⁴ 森銑三・鈴木棠三・朝倉治彦／編『日本庶民生活史料集成

第15卷

都市風俗 長崎歳時記 三一書房、P七八五

前掲注 4、P七八六

『長崎市史風俗編』長崎市、P三四四

前掲注 6、P三四四

前掲注 6、P三四四

前掲注 6、P三五〇

前掲注 6、P三五一

前掲注 6、P三五二

前掲注 6、P三五三

前掲注 6、P三五二

前掲注 6、P三五〇

『長崎市史地誌編 名勝旧跡部』長崎市、P一九〇

¹⁹ 精霊船の大きさ制限について。船の大きさは、全長十m、胴体七m、幅二・五m、担いたときの高さ三・五m以内となつてゐる。

²⁰ 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門／監修『講談社 日本人名大辞典』講談社、P一四四〇